



TITLE:

近畿地区国公立大学図書館協議会 の図書館業務機械化委員会

AUTHOR(S):

CITATION:

近畿地区国公立大学図書館協議会の図書館業務機械化委員会. 静脩
1970, 6(6): 3-3

ISSUE DATE:

1970-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36577>

RIGHT:

備充実させることが目下の急務でないかなどが討議された。

〔第3回〕議題：全学的な図書館組織のあり方について

前回議事報告の後、図書館人事・予算、図書の管理・運営の諸問題について、分館問題における建面積と予算の関係、全学的ビジョンの明確化、本館の3階増築、文献複写サービスの迅速化などが討議された。なお館長ならびに整理課長から図書専門職員による「大学図書館改革問題懇談会」の発足が報告・説明された。

近畿地区国公立大学図書館協議会の図書館業務機械化委員会

この委員会は京大が主査館となって昭和43年より業務の機械化について検討を進めてきたが、44年度は文部省が予算化を準備中であった高性能 PCS（パンチカード・システム—IBM モデル20）を中心に検討を行なった。

これは主に発注・受入と貸出返却および雑誌管理の業務にいかん機械を導入するか、また仕事の流れは現在に比較してどのように改善され、効率を上げ得るか等をフローチャート化して具体的に検討しており、近く報告がまとめられる予定である。

今のところこの PCS 導入にはなお問題点（前提となる業務の集中や標準化、システム自体の問題等）もあり、また予算措置を伴うこともあって早急には実現できないとしても、業務量の増大に対処してサービスの迅速化を図る等大学図書館の機能を高めるために機械化を推進する必要がある、本館としてもとりあえず部分的適用についての具体的な可能性を検討している。

一言・ふたこと

今の私にとって、図書室は、身分や権威をひけらかしはしないけれど、嘘や曖昧さに対しては極めて厳格な教師のいる所であり、時には、暫らく遠ざかっていると無性に逢いたくなる片想いの恋人に似た場所でもある。そして、ここ1年半ばかり、所属する研究室の図書の管理を任されている立場から見ると、それが研究と教育の中核施設の一つでありながら、今の政府の高等教育と科学技術に対する施策の貧困と歪みの縮図であるように思える。理学部化学科の図書室の場合、50周年記念事業で図書の充実を計られたとかで、雑誌のバックナンバーは京大の他教室と比べてもずいぶんよく揃っている。けれどもその少なくない図書を管理して下さっている職員は僅かに2人であり、しかもその1人は定員外職員と聞いているし、他の1人も図書室の専任ではない。絶対的に少ない職員の影響は、われわれ利用者の共同財産と

理学部化学教室
 図書室に想う

としての自覚の欠如にも原因があるのだろうが、100冊に近い単行本の行方不明という結果となり、大きな不便を蒙っているし、図書室の広さは、書庫とコピー室を合わせて実験室7スパン分であって、完全開架式の書棚と同居の閲覧机では深い思考は望むべくもない。マスコミでも宣伝されている情報化時代を迎え、飛躍的に増大しつつある情報量に押し潰されないためにも、その充実とともに大学の図書の運営は、全学的あるいは全国的な文献情報のオンライン化を含めて、抜本的な改革を期待したいが、これも早急の実現が困難となれば、せめて情報化時代の趨勢に流れ、深い思索の習慣と時間を失ない勝ちの院生、学生のために、図書室がまさに静脩の場を与えてくれることを願いたい。

（博士課程2回生 山岡 隆）